

白磁の人

江宮隆之



前橋市立図書館

☎(0272)24-4311



0210131306

白磁の人



著者 江宮隆之

一九九七年四月二二日 初版印刷
一九九七年五月二日 初版発行

発行者 清水勝

発行所 河出書房新社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二-32-12
☎ 〇三三四〇四一八六一 (編集)
〇三三四〇四一二〇一 (営業)
振替口座 〇〇一〇〇七-一〇八〇二

デザイン 栗津潔

印刷 暁印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。

©1997 Printed in Japan
ISBN4-309-40501-0



kawade bunko

江苏工业学院图书馆

藏書章

在書庫之

前橋市立図書館

館外用

目次

序章	「或る陶工のメモ」から	7
第一章	山笑う	19
第二章	萬緑	51
第三章	涼風	73
第四章	白光	103
第五章	花冷え	129
終章	「或る陶工のメモ」から	151

巧さんのこと——あとがきとして
文庫本のためのあとがき
感想

永島敏行

167 165 157

白磁の人

序章 「或る陶工のメモ」から

一枚の、セピア色をした写真があった。その小さな写真には三十代後半くらいの年齢の男性が一人で写っている。

膝小僧を両手で抱えて草の上に座って、楽しそうに微笑している。ロイド眼鏡めがねというのか、丸い黒縁眼鏡の奥が笑っているのだ。妙に心を惹かれ、懐かしい感情が込み上げてくるような気がしたものである。

それが、志半ばで急逝した「巧たくみさん」、浅川巧あさかわたくみとの最初の出会いであった。

そのころは、巧さんがどういう人で、どんなことをした人なのか、全く知らなかった。ただ、一枚のその写真が特別な意味合いを持つものであろうことは容易に予測できた。

柳先生やなぎが大切に、というよりは、まるでいつも身近に置くかのように、その写真額に入れ、書斎の壁に掛けているからである。しかも、時々埃ほこりを払っていると見えて、いつもその額には塵ちりひとつない。最初その写真を見た時に、この人は先生の縁者だろうか、と思ったほどだった――。

柳先生の書斎にはあまり人は近付かない。先生自身が書斎に人を近付けたがらないせいもあるが。

いつもは穏やかで優しい先生だが、書斎にいる時は厳しい表情に変わる。気難しくなるというのではない。明治二十二年（一八八九）の生まれだから既に六十七歳とい

う高齢に達しているので、という人もいるが、それは先生のことをよく知らない人間であろう。先生の厳しきとは自分に対しても他人に対しても変わらないのだから。私は、書齋が先生にとって唯一の仕事場であるからこそ厳しくなるのではないか、と思っている。

書齋を一步でも出た時の先生の柔和で温かな表情がそれを示しているし、書齋以外では先生の周辺にはいつも誰かがいる。ところが書齋にだけは誰も近付こうとしない。用事があっても書齋の先生を敬遠する人は多い。

私にしても他の書生たちと同じで、先生の書齋を訪ねるのは苦手だが、こういう訳か先生から書齋に来るよう呼ばれる回数、私が最も多いのだった。

私は大学二年生の時、高名な陶芸家の小さな個展を見て焼きものに惹かれ、中退して「土と炎の芸術」を志した。いくつかの窯^{かま}を転々とした後に、勉強したいことがあって柳先生の門を叩いた。

そんな私だけに先生の書齋に行つて楽しいことがひとつだけあった。それは高麗青磁や李朝白磁のあの控え目で奥床しい磁器の逸品と同時に、浜田庄司^{はまだしようじ}や河井寛次郎^{かゐいかんじろう}、バーナード・リーチといった柳先生と親交のある民芸家たちが焼いた陶芸を手に取つて見られることだ。

それが目的で私はおずおずと書齋に伺うのだが、私がそうした人たちの作品を手にとって見ている時でさえ先生の表情は厳しく、射すような視線さえ感じる。

「民芸」という、今でこそ一般にも通るようになった言葉は「民衆的工芸」を略した造語で、先生によって造られたものである。

先生は、柳宗悦やなぎむねよしといい、本来は宗教哲学が専門の人だったが、武者小路実篤むしやのこうじ さねあつ、志賀直哉なおやらの友人たちに影響を受け、同人誌『白樺』しろばに加わりもした。

先生は、塵に埋もれていた民衆が使う雑器に美を見出し、理解することを提唱し、それを「民芸」という運動にまで発展させたのだが、私たちのような若い、無名の陶芸志望者にも目をかけてくれる。

その日も私は書斎と呼ばれ、いくつか叱言こいごを言われた。叱られている間中、私は壁に掛けられている円い金縁の額がくを見つめていた。いや正確に言えば、額の中の写真を見つめていたのであった。

そういえば、と私は思った。その写真を見たのは今日が初めてのことでなく、これまで書斎に何う度にも目に入っていた。気になる写真であったが、その日はつい叱言を避けようとして、しみじみ見入ってしまった訳だ。

写真の男性の笑顔は、あらゆる事象を包み込むような慈しみと優しさに満ち、私の心を打った。初めて陶器を見た時と同じ気持ちにさせられた。先生は途中で私が壁の額を見つめていることに気付いて、自分も振り返った。そして突然、いつもの柔和な表情に戻ると、

「この人はね、浅川巧さんといってね。僕が若いころ、一番尊敬し、一番信頼してい

た人なのだよ。この人がいなかったら今の私の仕事は半分も成し得なかっただろうな」

と語った。先生のまなざしは感慨深そうで、それは遠い昔にあった大切な出来事をそっと思ひ出すようであった。温かい言い方であった。

私は、浅川巧、という人の名前は初めて耳にしたが、先生の、
「いつか、君にとつても、大切な人になると思う」

と続けた言葉とともに、その名前が私の胸に刻みこまれた。

誰からも好かれ、信頼され、敬われている先生をして、こうまで畏敬させた浅川巧という人とは一体どういう人物なのか。私の胸の底にはそんな思いが溜ってしまった。そこへ来客があり、先生は私を放免してくれた。

「そのちゃんか？ 何かあったのかな」

先生の表情がまた緩んだ。先生の仕事を凝縮したような日本民芸館で、館長の先生を補佐し、「柳先生と民芸館の生き字引き」と呼ばれて敬愛されている女性が、そのえ、さんで、先生は実の娘のように可愛がっていた。

私が書斎を辞す時に先生は、

「これを読んでごらん」

と言つて一冊の本を渡してくれた。

『国語巻六・中学校国語漢文科用』（岩波編輯部編）であった。昭和九年（一九三四）

から二十年（一九四五）まで旧制中学校（現在の高校）で使われた国語の教科書だ。

何だろうか、と訝る表情の私に先生は、

「巧さんのことが書いてあるのだ。安倍先生がね、書いている」と説明してくれた。

浅川巧、という人に私が興味を持ったことが先生には分かったらしい。

安倍先生、というのは戦後も間もない二十一年（一九四六）一月に、幣原喜重郎内閣の文部大臣となった安倍能成のことで、先生とも親しい。

現在の教育基本法の骨子と六三制教育の制定に尽力し、学習院院長をも務めた人だ。夏目漱石の門下で評論家、哲学者としても知られる。

つい先年（昭和二十七年末―二十八年二月）も日米文化交流のために渡米し、戦後の荒廃した日本を文化の側面から再興しようと努力している。先生も常に、

「安倍先生には頭が下がる」

と話しているが、先生と安倍能成とは朝鮮にいたころに交流が始まったらしい。確かそのころ先生は、朝鮮美術に傾注して朝鮮の各地を旅行していたはずである。当時、安倍は京城帝大の教授として赴任していた。

私は先生から手渡された旧制中学用の国語教科書を、自分の部屋に戻るとすぐにめくった。安倍の「人間の価値」という随筆が載っている。後で知ったことだが、「人間の価値」は安倍が浅川巧の死後、京城日報に連載した「浅川巧さんを惜しむ」の内

容を縮小し、修正した隨筆であつた。

——浅川巧さんは私の朝鮮生活を賑やかにしてくれ、力づけてくれ、楽しくしてくれ、朗かにしてくれる、尊い友人の一人であつた。少くともそういう友人になつてくれる、又なつてもらいたい人であつた。この人が春の花の咲くのも待たずに逝つてしまった。私は淋しい。街頭を歩きながらもこの人の事を思うと涙が出て来る。(中略)

——巧さんが朝鮮に渡つて總督府の山林部に勤められるようになったのは、大正三年五月、巧さんが二十四歳の時であつた。それから後十八年の歲月は、巧さんを深く深く朝鮮と結びつけて永久に離れられぬものにしてしまった。しかもこの十八年の勤労を以てして、巧さんは、死ぬ前、判任官の技手に過ぎなかつた。精勵恪勤にして有能類稀な巧さんの様な人に対する待遇として、誰がこれを十分だといおう。しかし巧さんの如きは、如何に微禄でも、卑官でも、その人によつてその職を尊くする力のある人である。巧さんがこの地位にあつて、その人間力の尊さと強さとを存分に發揮し得たということは、人間の価値の商品化される現代に於て如何に心強いことであつたろう。私は巧さんの為にも、世の為にも、寧ろこの事を喜びたい。(中略)

——骨董を愛玩する者は多い。しかし真に芸術を愛する者は少い。けれども芸術を愛するよりも更にむずかしいのは、人間を愛することである。(中略)

——巧さんは人の為にしたことをめつたに人には語られなかつた。けれども、巧さ

んの助力によって学資を得、独立の生活を営み、相当の地位を得るに至った朝鮮の人は、一人や二人ではなかったそうである。巧さんの死を聞いて集って来たこれらの人々の、慈父の死に対するような心からの悲しみは、見る人を惻々と動かしたという私も亦その一人を見た。彼は巧さんを本当のお父さんよりも懐しく思っていたといつた。そういう彼の顔には掩われぬ誠が見えた。巧さんは恐らくその真直な曇なき直覚で、人の気づかぬ朝鮮人の美点を見出されたのであろう。巧さんの心は朝鮮人の心を擱んでいた。その芸術の心を擱んでいたように。(中略)

——巧さんの生涯は、カントのいったように、人間の価値が実に人間にあり、それより多くも少なくもない事を実証した。私は心から人間浅川巧の前に頭を下げる。

私はこういった内容の「人間の価値」を一読してすっかり圧倒された。その筆致が敬愛あふれるものであり、短い文章で見事に浅川巧という人物を魅力的に描いていたためもある。だが、安倍といい、私の先生といい超一級の人を惹きつけて放さない浅川巧とは一体どういう人なのであろうか、という興味が「人間の価値」という一文によって尊敬に変わり、もつとこの人について知りたい、と思うようになっていた。

「人間の価値」を読みながら、私の心に浮かんできた色がある。そして読後、その色は一層鮮明になった。それは、深く温かい白色であった。どういう訳か、白色が突然思い出されて、先生の壁にあった額縁の中のセピア色の写真に重なった。今思い返してみ